

# 清末民初期における華僑社団の 対中教育支援に関する一考察 —僑郷との繋がり方を手がかりにして—

劉 琦

## 一 はじめに

清末民初期は中国の伝統社会が西学東漸の風を浴びながら崩壊し始めた時期である。激しい社会変革に臨む中国社会は内憂外患の窮境に陥っている。この時期に、東南沿海の地域（とりわけ福建省、広東省）にある農村地域において、貧困生活に追われて海外へ出稼ぎに行った華僑はわずかではない。それで、商売などでお金を稼いだ華僑らは故郷の抱える貧困問題を改善したいという思いで、様々な形で故郷への支援活動を行っていた。その中でも、特に故郷の貧困状況を徹底的に変えるために、多くの華僑は教育の重要性を深く意識し、教育の支援活動に力を入れた。清末民初期は、華僑による故郷への教育貢献がピークに達した一つの時期である。当初の故郷への教育支援活動は、個人で行われているのが一般であるが、海外の華僑社団の隆盛につれて、団体による故郷への教育支援活動が広がってきた。

ここで言及した華僑社団は、主に華僑によって設立された華僑組織である。羅（2010）は、華僑社団を「非政府組織の一種として、生まれつきの文化や血縁の絆に頼り、越境の活動を行っており、様々な領域において主権国家や他の非政府組織が果たしにくい役割を果たすことができる」と定義した。この華僑社団は、個人から発展してきた組織であり、華僑の様々な支援活動を順調に実施するために作られた団体である。華僑社団は華僑個人の力を集めるために、個人の力より強く、また故郷への教育支援活動もより効率的、組織的に実行することができる。

そして、華僑社団の類型に関しては、華僑研究界においては、様々な基準に基づいた分類法があるが、その中に、シンガポールの社団研究専門家である呉華が大きく貢献したものがある。呉によると、シンガポールの華僑社団は、地縁<sup>(1)</sup>、血縁<sup>(2)</sup>、業縁<sup>(3)</sup>という三つの種類に分けられる。また、方、許（1995）によると世界中の華僑社団も、呉と同様に、三つの種類に分けられる<sup>(4)</sup>。現代において、華僑によって設立された基金会は、徐々に多くなってきた。血縁組織のように、苗字などで名付けられ、家族宗親の資金に基づいて作られたのもよく見られる。

また、華僑社団の役割については、方、許（1995）は、顔清湟、陳烈甫の帰納に基づいて、「絆を固める」「仲を取り持つ」「公益活動を行う」という三つの役割があると指摘した。この三つの役割は、相互に繋がっており、切っても切れない関係である。「絆を固める」は土台で、「仲を取り持つ」は手

段で、「公益活動を行う」は最終の目的である。そのうち、「公益活動を行う」の役割は、華僑社団を結ぶ最初の役割ではないものの、社団の発展側面において重要な関連性があると思われる。

華僑社団による対中教育支援は、華僑の対中教育支援が発展してきた新たな段階であり、血縁や地縁の絆の強化または支援体系の組織化を示した。本稿は華僑社団がどのように僑郷と繋がり、教育資源を配分したのかを明らかにすることを課題として設定した。これについての研究は理論面で僑郷との繋がり方から華僑の対中教育支援の道筋を捉えると同時に、実践面で現在の対中教育支援活動に類型化のモデルを提供することができる、という大きなメリットがある。とともに、本稿の研究対象とした華僑社団は中国国外で設立した社団のみならず、故郷に対する教育支援活動を行うために設立した中国国内の社団も、視野に入れて、より広い範囲で華僑に関わる社団を取り扱いたい。

## 二 先行研究と研究方法

華僑に関する先行研究は幅広くあるが、本稿では、華僑社団及び華僑による故郷への教育貢献を中心に先行研究を検討した。

### 1 華僑社団に関する先行研究

華僑社団に関する研究は概論研究や専門研究からなっている。

概論研究に言及すると、華僑社団の定義、起源、歴史、類型、役割、発展状況などについての概説的な研究である。羅向陽の「当代華僑社団の越境する活動に関する研究」、方雄普、許振礼編の『海外華僑団体の追跡』、古華民の「海外の華僑華人社団の変化や発展傾向に関する考察」などが取り上げられる。

専門研究というと、特定の地域或いは特定の社団に焦点を当てて行った研究である。石滄金の『マレーシア華僑華人社団に関する研究』、呉華の『マレーシア華族会館の史略』『シンガポールの華族会館誌』、趙娜娜の『第二次世界大戦後、シンガポール、マレーシアにおける広東籍の華僑華人社団の文化的・教育的な機能の発展や変遷』、莫光木の「第二次世界大戦後、アメリカの華僑華人社団の発展」、徐東、馬曉龍の「民国時期、僑郷の地方教育へのミャンマーの華僑華人社団による影響——雲南騰冲の和順崇新会を例にして」、陳延杭の「集美学校の教育推广部による閩南教育への推進」、呉龍雲『平章会館と中華総商会およびペナンの華人社会——20世紀初の派閥、リーダー及びその相互作用』、夏斯雲の「民初華僑連合会論述」等々があげられる。以上の先行研究は本稿に背景知識や研究史料を提供した。

### 2 華僑による故郷への教育貢献に関する先行研究

華僑による故郷への教育貢献とは主に、地域研究（ケーススタディーが含まれる）、政策研究、人物研究などがある。地域研究では、福建省や広東省の僑郷<sup>(5)</sup>に対する教育貢献に関わる研究が一番多い。マクロの地域研究といえば、新保敦子の「海外華僑の中国に対する教育上の貢献」、王華の「海

外華僑華人による中国の図書館事業に対する寄贈に関する分析」、李高霞の「民国時期の華僑華人による広州教育事業に対する貢献」、呉瑩の『異域と本土：近代イギリス領マレーシア華僑教育の百年発展に関する研究——及び閩省僑郷に対する輻射に関する論述（1840-1941）』などがある。その中に、新保（1991）は教育統計の指標に準じて、福建省や広東省とりわけ僑郷の教育発展は民国時期以来全国範囲で遅れたレベルから先進的なレベルまで達成した点を明らかにしたうえで、華僑の献金による学校建設はその中に少なからぬ役割を果たした点も解明した<sup>(6)</sup>。ミクロの地域研究は、さらに数多くある。莊国土の「厦門への華僑華人による寄贈」、谷帥召の「清末民初台山華僑と僑郷教育」、劉慧宇の「民国時期福建省の農村における華僑小中学校」などがある。政策研究は基本的には清朝、民国時期または新中国成立後の華僑政策に重点を置く。例えば、段柏林、石川啓二の「清朝の華僑政策」や「中華民国期の華僑教育政策」、石川啓二、江麗臨の「中国の華僑教育政策」などがある。これは、華僑が故郷に戻り、教育支援を行うための政策条件を明らかにした。人物研究では著しい華僑教育家、慈善家に関する研究が本稿に豊かな資料を提供した。例えば、陳嘉庚に関する研究を挙げると、楊婉蓉の「華僑弁学のモデル——陳嘉庚と集美学村に関する研究」、陳碧瑩、陳毅明編の「陳嘉庚年譜」、石川健二郎の「陳嘉庚——ある華僑の心の故郷」、李燕の「愛国華僑・陳嘉庚の興学活動」等々がある。

つまり、これまで華僑社団に関する研究は華僑社団の起源、歴史や発展状況に関する概説研究または華僑社団に関するケース研究に集中しているが、僑郷との繋がり方を手がかりにして、華僑社団による教育支援活動を研究するのは稀である。つまり、海内外の華僑社団がどうやって僑郷と連携して対中教育支援活動に参加するかについての類型化の考察はまだ不十分である。そのため、筆者は、歴史文献に基づいて、ケース分析を通じて清末民初期の華僑社団による教育支援活動のルートに着目し、各主体の連携関係、教育資源の配分形式からその裏面に植えられる文化要因まで考察する。

### 三 華僑社団による対中教育支援ルート

本節では、対中教育支援活動が展開されるうちに、華僑社団と僑郷の繋がり方に基づいて、華僑社団の支援ルートを三つの種類に纏めておく。そして、具体的なケースを通して各ルートの詳細を分析する。

ルート1とは、連動型である。いわば、華僑が海外や国内で同時に華僑社団を作り、海内外の部門

ルート1

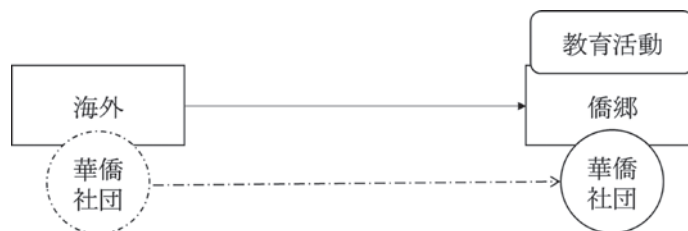


図1 華僑社団による対中教育支援のルート1

出典：筆者の作成

が連動して僑郷の教育支援活動を行う。海外の部門は資金や決策を提供する一方、国内の部門は具体的な教育実践活動を行う。

#### ケース A——地縁社団

1921 年、和順華僑は故郷で「悪人は横行したが、権力者は悪人を庇った」と強く感じ、加えてミャンマーにおいて「排華」運動が激しかったのに苦しんだ経験から、自力で自らを守る必要があると意識した。そのため、「促進会」と「青年会」を建設した。そして、二つの組織を合併して「青年促進会」を立てた。その上、1925 年 11 月に、「旅ミャン和順崇新会」が建立された。国内外の郷人は積極的に入会し、1936 年になると、名録の記載によって 673 人に達した<sup>(7)</sup>。「旅ミャン和順崇新会」の宗旨は「教育改革や普及」、「風習の改良」、「社会事業の建設」を通して、「故郷の現代社会化を実現する」。

崇新会は和順にいる者が構成した内部と海外にいる者が構成した外部からなっている。すべての取組は外部によって提唱され、内部によって実行される。内部では、郷政執行委員が設置され、下には農業科、経済科、統計科、法制科、教育科や衛生科がある。外部では、監察委員会が設置され、下には宣伝科、会計科、婦女科がある。資金の構成は入会費（国内の会員はミャンマー当時の貨幣二元、海外の会員は五元）、会員の寄贈と他（当会の会費を華僑商業銀行に貯金して得た利息）である<sup>(8)</sup>。つまり、崇新会は内外部の連動性が高い華僑社団であり、内部と外部の分業も明確である。

国内の教育活動に投じた経費は庶民学校の創設資金、学生への試験奨励、留学費用、書籍や新聞の経費からなっている。経費の構成から見ると、崇新会は幅広い教育支援活動を行うのを明らかにした。しかも、フォーマル教育からインフォーマル教育まで総合的な支援体制が整備された。

具体的に言うと、崇新会は和順の文化教育事業を改善するために、次の支援活動を行っていた。

#### (1) 新しい教育思想を宣伝し、教育を革新する。

- ・「国家を復興するために、先に教育を改善しなければならない。教育を改善するために、良師を集めなくてはいけない。良師になるために、自らの素養を強めなければいけない。良師を集めるために、生活を安定させなければならない」<sup>(9)</sup>という新しい教育思想を掲げた。
- ・教育整頓の計画を立てた。
- ・教育委員会を新設し、章程も作った。教育委員会の下には、校務委員会、執行委員会や学生会を設置した。

#### (2) 学校の条件を改善し、現代学校を創設する。

- ・全力を尽くし、和順の小学校教育を支える。
- ・1940 年、雲南省の初めての華僑学校である益群中学校を作った。
- ・学生の選抜や奨励を重視する。

#### (3) 民衆を啓蒙し、和順図書館を創設する。

#### (4) 世相風習を改め、社会風潮を変える。

- ・「和順崇新会刊」、「和順郷」という刊行物を出版した。これを世論陣地として、民主と科学の思想を宣伝する。

ルート 2

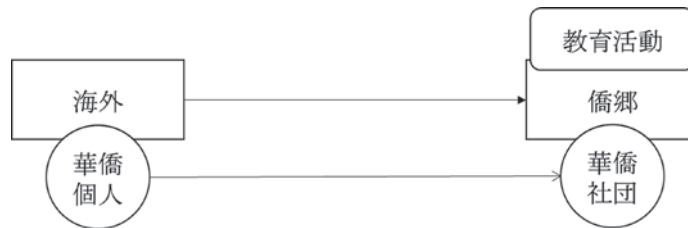


図2 華僑社団による対中教育支援のルート2

出典：筆者の作成

- ・「平民夜校」の創設を通じて、「平民教育」を展開する。
- ・様々な民衆娯楽活動を行い、民衆の生活を充実する。
- ・生産、生活や福祉の面においても合作社、慈善協会などを作り、民衆を救済したり、扶助したりする<sup>(10)</sup>。

要するに、崇新会は学校の教育の取組にとどまらず、和順地域の社会風土の改革にまで尽力している。ルート2は分離型の国内中心型である。いわば、華僑は故郷を中心として教育組織を創設する。

#### ケースB——地縁社団

著しい愛国華僑である陳嘉庚は「家産を傾け、教育を振興する」と称賛された。南洋の商売で稼いだお金を故郷の教育事業に投じ、故郷の教育振興に大きく貢献した。故郷の教育水準を高めるために、彼は集美学村、厦門大学や図書館などの教育文化施設を創設した。初めに、閩南において、初等教育を普及するために、陳嘉庚は各郷の董事会と協力し、当地の有力者の力を借り、子供らの教育を救済した。元の祠堂などを教室として使われたのがほとんどである。

1919年6月、陳嘉庚はシンガポールから戻り、同安の郷村で考察を行った。当時の農村地域の発展が遅れており、教育を振興する人がなかったと発見した。全県のお金を持つ華僑らを学校建設に動員させるために、1919年に、故郷で「同安教育会」という教育振興財団を設立した。当時、陳嘉庚は通常経費の1万銀元や各学校の設備費用1万銀元を同安教育会に寄贈し、会長を担い、弟の陳敬賢に運営を委任して学校施設の充実を図った。同年、陳嘉庚はシンガポールに戻った時、海外の同安郷人を集め、故郷の教育事業を支援するために、小学校の補助金として使われる資金を募集した。最終的に、通年経費の2万元や設備費数万元を募集した<sup>(11)</sup>。

1920年、同安教育会は同安教育補助処を設立し、各郷の小学校建設を補助しはじめた。補助金額は学生数にもとづいて計算した。高等小学校は一人ごとに8元であり、初等小学校は一人ごと5元である。なお、机、教具などの補助ルールは一人ごとに3元である。同安の教育事業は速く発展してきて、当時の学校数は30余ヶ所にのぼった。資金の補助以外に、各校の学生人数や教学状況を把握するために同安教育会は各校を視察する職員を派遣していた。同安教育会は海外の同安華僑商人の支持を得た。しかし、1921年南洋の商業は不況になってきたため、華僑が寄贈した資金は少なくなった。



1921-1922 年間は 2 万元しか得なかった。足りない部分は陳嘉庚が負担した<sup>(12)</sup>。

しかし、1923 年、華僑によって寄贈された資金が少ないために、同安教育会が取り消された。代わりに、集美学校の「教育推广部」の名義で経費の足りない学校を補助するように変わった。各郷では、新しく設立された学校に創校経費を寄贈するほか、一、二年後、学校の経営業績に準じて、平年の経費を補助する。その趣旨は、「閩南教育を広げる」である。当時の集美学校校長である葉淵は教育推广部の主任や視察の職務を担当した。

陳は当時の集美学校の校長である葉淵への手紙にこう語った。「西方のことわざによると、誠意を持つ公益事業に従事する者は身近くから遠くのところへという。故に、私は故郷の教育事業を優先して改善しなければならない。個人の名義で宣伝したり、他人を派遣することで宣伝したり、手紙で宣伝したりするのを通じて、学校創設を励ますことをやらせてください。故郷を愛する人を参加させるのを通じて教育事業を順調に行う。」<sup>(13)</sup>

1926 年、陳嘉庚はシンガポールやマレーシアにおける実業の大発展のため、支援の範囲は同安県から閩南の各県に広げた。時期に分けて同安県で 100 校を支援し、閩南の各県で 500 校を支援することを計画した。結果、教育推广部が取り消されるまでに、福建省で、補助金を受けた学校数は 20 県・市の 74 校（同安は 49 校）であった。補助金の総額は 20 万元あまりであった<sup>(14)</sup>。

陳（2005）によると、補助金を受けた学校は三つの種類に分けられた。一つ目は、教育推广部は経費を補助するほかに、教学指導も提供する。二つ目は、資金は当地の華僑らが寄贈し、教学指導は教育推广部が提供する。三つ目は、経費は陳嘉庚が寄贈し、学校運営を学校に任せる<sup>(15)</sup>。

経費を補助する以外に、閩南小学校に対する行政管理や教学実施などについて指導意見も提供する。1924 年の夏、集美学校は「閩南小学校教育研究会」を設立し、各小学校は通信選挙を通じて、葉淵を研究会の会長に就任させた。閩南小学校教育研究会の代表的な取り組みは夏休み学校や校長研修会である。まず、夏休み学校では、北京市、江蘇省、浙江省の教育専門家を教師として雇い、教育制度、教育行政、教育マネジメント、児童心理、法律、教育発展傾向などの科目を設置した。そして、1926-1931 年に、陳延庭は教育推广部の主任に就任し、補助を受けた学校の校長会議を行った（毎年一回）。

同安教育会、教育推广部や閩南小学校教育研究会のような組織は陳嘉庚が故郷で教育事業を展開し

表 1 校長研修会の概況

| 年    | 参加した代表学校数（人数） | 内 容                                |
|------|---------------|------------------------------------|
| 1926 | 13 校（17 人）    | 補助を受けた学校の業績展覧会の定期的な開催を協議した         |
| 1927 | 16 校（20 人）    | 各区の小学校研究会を協議した                     |
| 1928 | 38 校（44 人）    | 国語教学研究を決議した。1929 年 3 月、初等教育研究会を結んだ |
| 1929 | 42 校（47 人）    | 小学校の教訓教育課題を検討した                    |
| 1930 | 34 校（40 人）    | 郷村小学校の課程基準を検討し、自然科学研究を行った          |
| 1931 | 30 校（35 人）    | 不詳                                 |

出典：陳延杭（2005）<sup>(16)</sup>に基づいて筆者の作成

ルート 3

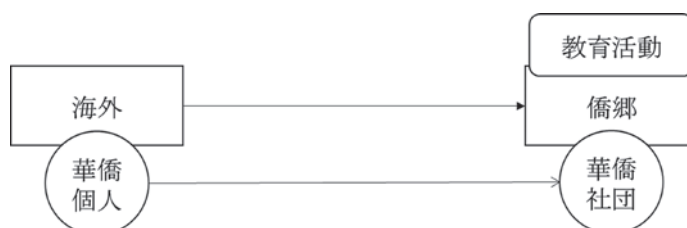


図3 華僑社団による対中教育支援のルート3

出典：筆者の作成

ている時に設立した組織であり、同安を中心とした地域の教育発展に資金の以外に、知力支援も提供した。こうして教育資源の整備や流動を促すために環境を整えてきた。

ルート3は完全分離型である。国外の華僑社団は教育支援と直接関わらず、ただ資金を寄贈する。このルートに従った教育支援活動は資金や図書寄贈という一時の慈善活動となる場合が多い。組織化の程度が低いため、諸社団の力を繋ぎ、寄贈の情熱を喚起するリーダーがこのルートに働く役割は極めて重要である。そのリーダーは愛国心・愛郷心を強く持っている華僑個人或いは華僑社団である。

#### ケースC——地縁社団

ケースCは個人の力で海外の華僑社団の寄贈の意欲を喚起する例である。

陳嘉庚も海外の華僑社団を動員し、僑郷への教育支援を促す。これはルート③に分類される。陳嘉庚はシンガポールに戻った後、シンガポールの華僑社団を動員し、故郷の教育支援を促した。

彼はシンガポールに高い声望で多くの華僑社団のリーダーを担当している。例えば、謙愛樹膠公会という同族組織の財団を創設し、社会福祉・教育振興のため寄贈を推進した。また、1929年3月、彼は福建会館の主席として、新委員会の就任式でこう語った。「今現在、教育課題は取り組まなければならない課題である。そして、教育の命脈は経済にかかっている。……さらに、教育と言及すると、海外の教育だけを指していなく、とりわけ祖国の教育に注意を支払う必要がある。」<sup>(17)</sup>陳嘉庚は福建会館の主席の在任期間に福建省の教育を非常に重要視し、さらに福建会館の力を借り、多くの華僑らが故郷の教育発展に身を投じるのを励ましたと推察できる。

#### ケースD——血縁社団

ケースDは同姓族人の力で海外の華僑または華僑社団を動員する例である。

広東省の赤坎鎮は上埠、下埠という二つ部分からなっている。上埠の人は関の姓で、下埠の人は司徒の姓である。この二つの宗族は長い間お互いに競争したり、促し合ったりし、強い宗族意識を身に付けた。

1926年、司徒氏族人は広東省の開平市において司徒氏通俗図書館の建設を提唱した。図書館は1923年に建設されはじめ、1925年に竣工した。司徒氏家族は「教えるに人倫を以てせしむる」を族訓として、文化教育事業を重要視する。加えて、海外の生活の屈辱に苦しんだため、国や故郷の貧弱

状況を改善しないと状況を変えられないと深く感じた。よって、豊かな国を建設するために、文化教育をさらに重視し、青年らの勉強場所や文化交流の場所としての図書館を創設した。これは一人の力ではなく、司徒氏族人を中心とした海外華僑の団体の力である。

1920年、司徒氏は埠聯興町の福音堂をリースし、閲覧室を創設した。海外の郷人が寄贈した資金で書籍を購入し、借覧サービスを提供しはじめた。当地の民衆の大好評が得られた後、大きく励まされたアメリカ、カナダやフィリピンの司徒氏族人は図書館を建設することと決意し、再び海外で資金を集めた。その他、図書館の創設家族の壮举を多くの人に知らせるために、「教倫月報」も創刊された。1922年、海外での募金総額は4万銀元以上に達した<sup>(18)</sup>。

司徒氏通俗図書館に励まされ、1925年、「閩族図書館準備委員会」が設立された。同年、閩族族人は「族刊」としての「光裕月報」を創刊し、中国の海内外の郷人に連絡し、募金をはじめた。1927年10月になると、募集した銀元は3万6千に達した。閩族などの信頼に応えるために、閩国暖は図書館の平面図の設計、材料の購入から図書館の建設過程まで真面目に対応していた。海外の華僑らは最初の資金寄贈から物資寄贈に変わってきた。1929年、閩氏族人は閩族図書館を建設しはじめた。1931年、閩族図書館が竣工した<sup>(19)</sup>。

#### 四 考察

本節では、第三節で取り扱ったケースの特徴を教育支援の視野において帰納した上で、華僑社団による教育支援活動に表れた現象に関する文化帰因を解明する。

##### 1 ケースの帰納

前述のように、三つのルートは連動型、分離型の国内中心型や完全分離型となっている。そのなかには、連動型は国内外の華僑社団の連携が一番強固であり、国内外どれも組織化の程度が高い。そして、国内中心型は国内のみが組織化となり、海外との連携は資金の供給がほとんどで、活動の計画や実践がすべて国内で行われている。最後、完全分離型は国内外の連携が一番弱く、国内においても国外に

表2 三種類のルートに関する要素帰納

| ル　　ート | 参加する華僑社団                   | 属　　性         | 教育支援活動    |
|-------|----------------------------|--------------|-----------|
| ①     | 和順崇新会                      | 地縁社団         | 総合的な活動    |
| ②     | 同安教育会→教育推广部<br>→閩南小学校教育研究会 | 地縁社団→学校の付設組織 | 総合的な活動    |
| ③     | 謙愛樹膠公会                     | 業縁社団         | 資金寄贈      |
|       | 福建会馆                       | 地縁社団         | 資金寄贈      |
|       | 閩氏族人                       | 血縁社団         | 資金寄贈、図書寄贈 |
|       | 司徒氏族人                      | 血縁社団         | 資金寄贈、図書寄贈 |

出典：前述の分析に基づいて筆者の作成



においても華僑社団の組織化が低く、教育事業に貢献するのが一時の慈善活動のイメージが強い。

三つのルートがあるが、その共通性は、発端する時に先導者（提唱者）が不可欠な要素となることである。また、教育事業をやり続けるために、家族ひいては地域に頼る程度も高い。ルート①では、華僑社団は中国の国内外でそれぞれ一つの部分を設置しており、国外の部分は資金を集めることを主務として働き、国内の部分は当地の具体的な教育実践活動や総会の決議を実行している。資金の構成は会員の入会費や会員による寄贈資金からなっている。このような資金供給リンクは一時的な資金募集より穏やかである。ルート②では、教育事業の発展も資金の提供も陳嘉庚の個人的な貢献が極めて大きい。教育社団は陳嘉庚の提唱によって設立された。陳嘉庚は強い愛国精神や教育振興への情熱に加えて、南洋の商売で稼いだ巨額の資金を持つ。精神上の激励においても、物質上の基礎においても、故郷の教育振興に可能性を提供した。

以上の二つのルートを選ぶ華僑社団は一時的な寄贈ではなく、というよりむしろ計画性に富む地域教育の長期発展を目指している。教育支援活動の内容は異なっても総合的なシステムとなっている。一方、ルート③はこの中で最も普遍的な支援ルートである。実は、分析によると、ルート①やルート②はルート③を含んでおり、言い換えればルート③に基づいて発展し、さらにシステムティックなルートとなっている。ルート③は華僑社団の属性と関係しないし、教育と関係しない。ルート③では、どのような種類の社団も故郷への教育寄贈を行う可能性がある。

## 2 華僑社団の根底にある地域や宗親の絆

華僑社団が故郷への教育支援活動を行うルートが異なるにもかかわらず、どのルートにおいても、地域や宗親の絆に密接に関わる。いわゆる、地域や宗親の絆は華僑社団の根底にある。

### 2.1 地域や宗親の絆の内包

地域や宗親の絆の内包には、二つのポイントがある。一点目は華僑社団と故郷の絆である。二点目は諸華僑社団の間の絆である。それでは、この二つのポイントについて論述していきたい。

まず、華僑社団と故郷の絆は華僑らが故郷に戻って教育事業を振興する要因である。故郷の教育事業を振興するために、最初は個人で物資を寄贈するケースが多いが、教育支援事業の成長とともに、一人の力では足りなくなる。故郷の教育を引き続き支援したいと思う華僑は海外の華僑社団の力あるいは当地で作った社団の力を借り、多くの人を教育支援事業に参加させようとする。また、このような寄贈行為は他の華僑が自発的に故郷の教育事業の振興に力を入れることを励ました。例えば、陳嘉庚の寄贈行為は同郷の多くの華僑らを励ました。統計によると、晋江県のみで、1925-1927年間に華僑によって設立した学校は53校となり、全県の120校の44%を占めている。南安県で、抗日戦争の前に、華僑によって設立した学校は40校以上となっている<sup>(20)</sup>。

そして、諸華僑社団の間の絆が華僑の教育支援活動を促すメカニズムは基本的には二つがある。一つは協力関係である。具体的に言えば、崇新会のように、海外の華僑社団は国内の華僑社団による活動のために資金を寄贈している。もう一つは競争関係である。具体的に言えば、閩氏族人と司徒氏族

人のように、お互いに競争し合い、故郷の図書館事業に貢献している。

## 2.2 地域や宗親の絆が教育支援活動に与える影響

実は、前で分析したこの絆は華僑社団の教育支援活動を支える鍵の要素となる一方、対中教育支援活動のさらなる発展を制限する要因となる。

### 2.2.1 教育支援活動の継承性の維持

まず、地域や宗親の絆は教育支援活動を支えている。陳嘉庚は同安教育会を創設する最初、運営の仕事を弟である陳敬賢に委託した。陳氏の兄弟二人は教育や商売の領域でお互いに扶助し合う。また、陳嘉庚の嫁婿である李光前は陳嘉庚の企業が不況を被る時期に、厦門大学や集美学校を大いに助けた。1936年、彼は5万元を厦門大学を支える基金として寄贈した。その金額は全ての寄贈資金の37.5%を占めている<sup>(21)</sup>。司徒氏通俗図書館や関氏図書館の建設は同一地域の司徒氏や関氏の両族がお互いに競争し合ったり、激励し合ったりする過程で進んだ。よって、地域や宗親の絆は華僑社団の教育支援活動を支えていく鍵である。

かえって、教育支援活動は地域や宗親の絆を強化する。宗親や地域の絆によって建設された学校や組織は人材養成を通じて、この絆をさらに強化し、教育事業を広げる。例えば、元は集美学校推广部の事務員である彭友圃は松山小学校で働く時に集美学校教育推广部から補助金を受け取り、松山小学校に貢献する。侯亭小学校の1939年の校長である陳光典は集美普通師範学校の1938年の卒業生である。官山小学校の校長である林発秀は集美師範学校の卒業生である。覚民小学校の最初任の校長である董仁章は集美高等師範学校の1926年の卒業生である。以上の小学校と集美学校の絆は人材の流動で築かれる<sup>(22)</sup>。

### 2.2.2 教育支援活動の更なる発展の制限

地域や宗親の絆は最も重要な要素となる同時に、華僑の教育支援事業の更なる発展を制限する要因となる。族人や地域の人の視野が広いと、当地の教育支援事業においては大きな発展を成し遂げる可能性も高い。反対に、族人や地域の人の視野が狭いと、教育支援事業がそのままに限られてしまう。

宗親関係の緊密さや族人の視野は教育事業の発展程度に影響を与える可能性がある。陳嘉庚が教育事業を行うのは家族の名望を守るよりむしろ愛国情熱を有しているためである。故郷の教育状況を改善するのみならず、「身近くのところから遠くへ」と思いながら、お金があれば、できるだけ広い地域の教育状況を改善しようと意気込んでいる。愛国の情熱は陳嘉庚が行った膨大な教育事業のエネルギーのもとである。教育水準を高めるために、陳嘉庚は当時有名な教育専門家に任せ、学校を運営させた。これと比べると、「家族の声望を守る」華僑にとどまる華僑社団は教育支援の規模も少ないし、影響力も限られた。

## 五 おわりに

本稿で取り扱った例から分析すると、華僑社団による教育支援活動は三つのルートに集中している。華僑社団と故郷の繋がり方によって、「連動型」「国内中心型」や「完全分離型」がある。教育支

援活動の展開仕方や程度はルートごとに異なっている。さらに、三つのルートの形成は各華僑社団の属性や設立のきっかけによって違っている。いずれにせよ、どのルートにおいても華僑社団の教育支援活動を支える重要な要因は地域や宗族の絆である。地域や宗族の絆は華僑社団の教育支援活動に大きな影響を与えた。地域や宗族の絆は教育支援活動の継承性を維持することができる一方、その更なる発展を制限することもある。本稿では、華僑社団と僑郷の繋がりを手がかりに、類型化の考察を通じて、華僑社団の教育支援に関わる研究に貢献した。今後、本研究の結論をもとに、現代の華僑社団の教育支援活動との比較研究を行い、その繋がりがや変遷を明らかにしていきたい<sup>(23)</sup>。

注(1) 地縁組織というのは、即ち地縁の絆に基づいて成り立った社団である。（会館、同郷会など）

(2) 血縁組織というのは、即ち血縁の絆に基づいて成り立った社団である。（宗親会館——苗字に基づいて作られた）

(3) 業縁組織というのは、即ち業界の絆に基づいて成り立った社団である。（業種商会、業種公会、業種聯誼組織など——中華総商会）

(4) 方雄普、許振礼（編著）。海外華僑団体の追跡。北京：中国華僑出版社、1995: 11.

(5) 僑郷は即ち「華僑の故郷」である。華僑研究学界において統一した基準がないにもかかわらず、華僑の数は一定の割合しかに達していないところは「僑郷」と呼ばれる。

(6) 西村俊一編著。現代中国と華僑教育：新世紀に向かう東アジアの胎動。東京：多賀出版、1991: 203-236.

(7) 徐東、馬曉龍。民国時期、僑郷の地方教育へのミャンマーの華僑華人社団による影響——雲南騰冲の和順崇新会を例にして。保山学院学報、2012、31 (04): 21.

(8) 同上、第 22 頁。

(9) 楊發恩。中国の魅力的な名鎮である和順・郷土卷。雲南：雲南教育出版社、2005: 277.

(10) 徐東、馬曉龍、前掲論文、第 22-24 頁。

(11) 呉瑩。異域と本土：近代イギリス領マレーシア華僑教育の百年発展に関する研究及び閩省僑郷に対する輻射に関する論述（1840-1941）。華東師範大学、2013: 180.

(12) 同上、第 180 頁。

(13) 陳碧笙、陳毅明編。陳嘉庚年譜。福州：福建人民出版社、1986: 49.

(14) 陳延杭。集美学校の教育推広部による閩南教育への推進。『譜牒研究と華僑華人』ゼミナール論文集。晉江市譜牒研究会、福建省民俗学会、2005: 332.

(15) 同上、第 335 頁。

(16) 同上、第 337 頁。

(17) 陳碧笙、陳毅明編、前掲書、第 64 頁。

(18) 司徒氏通俗図書館、<https://hk.chiculture.net/30039/b15.html>、閲覧日 2020.07.07.

(19) 閩族図書館、<https://hk.chiculture.net/30039/b16.html>、閲覧日 2020.07.07.

(20) 陳延杭、前掲論文、第 315 頁。

(21) 李光前と厦門大学、<https://kknews.cc/history/3xpgxyy.html>、閲覧日 2020.07.15.

(22) 陳延杭、前掲論文、第 342-344 頁。

(23) 本論文は中国国家留学基金管理委員会（CSC）による「中国国家建設高水準大学公費派遣研究生受入制度」の資金支援を受けた。